
山梨大学教育学部附属教育実践総合センター

センターだより 第154号 (通巻第221号)

2017年9月25日 発行
山梨大学教育学部
附属教育実践総合センター
TEL 055-220-8325, FAX 055-220-8790
E-mail: jissen@ml.yamanashi.ac.jp
URL: <http://www.cer.yamanashi.ac.jp/>

■山梨県教育委員会「中堅教諭等資質向上研修（山梨大学講座）」の開催

山梨県教育委員会との連携事業として8月4日(土)、中堅教諭等資質向上研修(山梨大学講座)を開催いたしました。この講座は中堅教諭等(教職経験11年目教諭)を対象に、大学における様々な分野の講義を受講することにより教員としての視野を広げ、職務遂行上必要な資質の向上を図ることを目的としています。今年度の山梨大学講座は教育学部のほか、生命環境学部、障害学生就学支援室の先生方のご協力を得て実施し、約180名の受講がありました。講義内容と受講後の感想(一部)は以下の通りです。

○国産ワインと発酵食品について(生命環境学部 柳田藤寿先生)

山梨の特産である日本ワインと発酵食品について興味深い研修だった。昔から、健康・長寿には「発酵食品」の利用がいられていたが、これまでの食材だけでなく、海や富士六湖の水から発酵酵母の分離やワインづくりに活用するなど、そのアイデアが規定の枠にとらわれない考え方で、こんな考え方もあるのか・・・と驚かされた。楽しい研修でした(受講生アンケートより)。

○障がいのある方の雇用について(障害学生就学支援室 森屋直樹先生)

とても関心のある内容だったので、学ぶことが多くある研修であった。実際に、これまで障がいのある方の雇用に携わってこられた方が講師として実践例を交えながら話し下さったので、実践例から就職後に具体的にどのようなことが課題となるのか、各支援機関の就労支援はどのように行われているのか、一部ではあるが現状について知ることができた。同時に、就労できたとしてもその後同じ職場で働き続けることの難しさを知り、学校在籍中に生徒の将来を見据えて必要な力を身につけさせること、きちんとアセスメントをしていくことの重要性、責任の重さについて改めて考えさせられる機会にもなった(受講生アンケートより)。

○中国古典文学「孫悟空と張飛」(教育学部 上原究一先生)

「身近なものでも、突き詰めて調べてみると新しい側面が見えてくる。」と先生が話されていたことが、心に残りました。子どもたちの学習でも、身近なことから疑問を見つけたり、詳しく調べていったりすることを教師が支援できればいいと感じました(受講生アンケートより)。

○通常学級における発達障害のある子どもの理解と支援(教育学部 松下浩之先生)

通常学級における発達障害のある子どもの理解と支援について、実際の事例をふまえて話をうかがうことができ、参考になりました。障害の特性を理解した上で、より社会に適応するために必要な態度や姿勢を育てていくために、教師側として子どものモチベーションを下げないよう上手に指導していく工夫をすることが大切であることを感じました。

■第1回山梨大学教師塾「授業力養成講座」の開催

教育学部附属教育実践総合センターでは、8月24日（木）に平成29年度山梨大学教師塾第1弾「授業力養成講座」を開催しました。この事業は平成29年度戦略・公募プロジェクト（教育関連プロジェクト）「山梨大学教師塾プログラム」の採択を受けて実施したものです。

「後期の教育実習が始まるけれど・・・」、「教育実習に行ったら授業はどう進めればいいのか?」、「指導案の書き方があまりよくわからなくて・・・」、「1時間の授業展開のイメージがつかめない・・・」、「授業中の子どもの発言への対応ってどうすればいいのか?」といった不安や疑問をかかえ、授業力の向上を願っている学部1年生から大学院生を対象に、現場経験豊富な教員による模擬授業や個別指導を行いました。今年度は学部1年生から教職大学院2年生までの計10名が参加しました。

全体会では、授業力養成のポイントとして、授業への心構え、学習指導案作成上の留意点、目の前の子どもたちへの具体的な対応などについて、具体例を基に考える時間となりました。

その後は教科別（国語、算数・数学、英語、社会）に分かれて、①講師による模擬授業、②指導案の書き方及び授業実践例、③授業づくりのヒント等について、少人数による協議が活発に行われました。普段疑問に思っていることや不安に感じていることも気軽に意見交流できる、とても有意義な時間になりました。



[受講者アンケートより]

- ・ 授業のやり方について実際に授業を受けながら話を聞いてよかった。
- ・ 自分がする単元の授業展開を一緒に考えてもらえてよかった。
- ・ 指導案の話しに付随して、学校生活でのお話など非常に参考になる話をお聞きできて、とてもよかった。
- ・ 各講師の先生が長年の経験の中で培ってきた授業の方法や工夫を知ることができてよかった。またこういう機会を企画してほしい。
- ・ 教育実習を来年に控え不安でしたが、今回の話を聞いて、とても身になったと感じています。とても有意義な時間でした。ありがとうございました。

なお、講座の内容や当日の様子については、以下の教育実践総合センターのWEBサイトに詳しい内容が掲載されていますので、そちらをご覧ください。

http://www.cer.yamanashi.ac.jp/web_up_file/H29jugyouryoku.pdf

■「第1回連携・教育研究会」の報告

平成29年9月14日(木)に、山梨県総合教育センターにおいて、「第1回連携・教育研究会」を開催しました。この取組は、教員養成や教員研修に関わって、山梨大学と山梨県教育委員会(山梨県総合教育センター)がそれぞれの「強み」を生かして連携し、双方の成果を上げようという研究会です。

全体会では、昨年度の反省を踏まえた中で、今年度の取組の方向性等が確認されました。主には、この連携・教育研究会を核として情報を交換し合い、その成果を山梨大学の学生に対して行う「学校制度・経営論」の講義に活かす取組と、山梨県総合教育センターの研究(全体テーマ「未来を担う子どもを育てる学校教育の総合的な支援」、サブテーマ「～生きる力を育む実践的指導の在り方～」のもと、次期学習指導要領を見据えた『先進プロジェクト研究』と学校現場の今日的課題解決のための『教育実践研究』に取り組む)には、山梨大学の教員もアドバイザーとして一緒に取り組み、研究発表大会で県内の教員に還元していく取組が確認されました。総合教育センターの研究の一つのブロック「先進プロジェクト研究」では、「①主体的・対話的で深い学びに関する研究」「②外国語教育の充実にに関する研究」「③情報教育に関する研究」「④探求の時間・探求科目に関する研究」について研究を進めていきます。また、もう一つのブロック『教育実践研究』では、「①確かな学力育成に関する研究」「②教育相談に関する研究」「特別支援教育に関する研究」を進めていきます。

全体会が行われた後の各分科会では、センター研究の内容と今後の取組等について協議されました。山梨県総合教育センターにおける研究への支援に関わって、大学側から今年度は以下の教員が参加をします。附属教育実践総合センターからは、田中勝センター長、堀之内睦男特任教授、小林大教授、成田雅博准教授、窪島紀人客員教授、岡田正志客員教授、猪股真弥仁准教授が、そして、大学院教育学研究科からは、教育支援科学講座の鳥海順子教授、科学文化教育講座の松森靖夫教授、言語文化教育講座の田中武夫教授、芸術文化教育講座の大内邦靖准教授、教育支援科学講座の田中健史朗准教授が参加します。双方の「強み」を生かした連携を通して、山梨教育の益々の発展に寄与できればと思っています。



■大分大学主催・国立大学協会共催「平成29年度大学改革シンポジウム ― 地域における附属学校の役割 ―」並びに大分大学教育学部附属小学校学校視察の報告

国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校園の改革に関する有識者会議の報告書「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」が平成29年8月29日に出され、国立教員養成系大学・学部の改革が第3期中期目標の具現化を含め、待ったなしで進められることになりま

した。

このような中、9月8日（金）に大分大学教育学部附属小学校の学校視察が、9日（土）には大分大学で「平成29年度大学改革シンポジウム」が開催されました。大分大学教育学部附属小学校は、附属幼稚園・附属中学校・附属特別支援学校とともに学部改組を受け、学部・大分県教育委員会等と連携しつつ、地域に必要とされる学校園を目指したガバナンス改革やカリキュラム改革に取り組み、地域に役立つモデルを提供する学校として有識者会議の改革推進のモデルとして取り上げられるなど大胆かつスピーディに改革を進めています。今回のシンポジウムは、大分大学が、附属小学校の全国から注目を集めている取組を広く紹介するとともに、地域社会から信頼され、その成果を地域に対して還元できる学校園にするために、大学及び附属学校園はどう在るべきかを考えることを目的に開催されました。

○期日・場所 [学校視察] 平成29年9月8日（金） 大分大学教育学部附属小学校
[シンポジウム] 平成29年9月9日（土） 大分大学且野原キャンパス

○附属小学校学校視察の日程と附属小学校の改革の主な内容

- | | | | |
|---------------|-------------|--|-------------------|
| (1) オリエンテーション | ①校長あいさつ | ②日程説明 | ③説明「大分大学附属小学校の教育」 |
| (2) 授業参観 | ①外国語モジュール学習 | ②通常授業 | |
| (3) 説明及び意見交換会 | ①参会者自己紹介 | ②説明「大分大学附属小学校ビフォアアフター」(スクラップ&スリム・ビルド、組織改革、教育実習の高度化等について) | |
| | ③協議 | ④柳澤好治文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長より | |

□改革を初めて4年間の経緯をパワーポイント、資料を使っての説明があった後、出席者からの質問に答える形で意見交換が行われた。パワーポイントの表題は「大分大学附属小学校方式劇的？ビフォアアフター」。ステップZero（使命の確認&現状認識）、ステップI（附属の使命を果たすには機能停止の組織を機能させ大胆かつスピーディに判断実行できる組織へと組織改編）、ステップII（附属の使命を果たすために子どもや保護者、教職員への過度の負担や前例踏襲をスクラップ&スリム）、ステップIII（附属の使命を果たすために学部や県と連携した取組をスクラップ&ビルド）、ステップIV（附属の使命を果たすために行った改革のアフターをチェック-エビデンス）の4つのステップを踏みながら改革を進め、見える形での成果・他からの評価（「子どもと向き合う時間が増え、落ち着いた教室」「笑顔と熱気、学びがあふれる職員室」「学生も達成感が得られる教育実習」「県教委が信頼と期待を寄せる学校！」「校内はもちろん学部とも連携した教育実習へ！」「学部、他校園との連携が密に！」等）を得ている現状について説明・意見交換がなされた。



□資料として配られた「大分大学教育学部附属小学校 改革中間総括 平成29年9月3日版」には、次のような文章で＜成果＞の一端を示している。

＜附属学校の存在意義の明確化と大学のガバナンス＞

- ・附属四校園連携統括長による会議など附属校園内の組織が明確になり、大学のガバナンスが発揮される土壌ができた。
- ・附属学校として、地域の先導的・モデル的な役割と教職員養成機能の充実という地域貢献を明確に前面に打ち出し、組織改革、学校改革を行うだけでなく、働き方改革も進めるとともに、エビデンスに基づいて取組の検証を行ってきた。

- ・教職生活全体を見据えた教員研修として、教育実習の高度化、若手教員対象のフォローアップ研修への協力、全世代が学ぶことのできるセミナー等を実施してきた。
- ・校長が常勤化され、上記のような取組にリーダーシップを発揮するとともに、学部とのパイプ役を担ってきた。

○「大学改革シンポジウム」の次第と主な内容

- (1) 開会挨拶 望月 聡 大分大学副学長・教育改革担当
- (2) 基調講演 「地域社会における附属学校園の役割」
水落芳明 上越教育大学教職大学院教授・学長特別補佐
- (3) パネルディスカッション 「大分大学教育学部附属学校園が目指すもの～地域との連携を中心に～」
指定討論者：柳澤好治 文部科学省高等教育局大学振興課 教員養成企画室長
パネリスト：河野雄二 大分大学教育学部附属小学校長
川崙道広 大分大学教育学部附属学校園連携統括長
米持武彦 大分県教育委員会義務教育課長
助言者：水落芳明 上越教育大学教職大学院教授・学長特別補佐
ファシリテーター：望月 聡 大分大学副学長
- (4) 閉会挨拶 越智義道 大分大学理事教育担当・副学長



□基調講演の概要

初めに、国立の附属学校園の設置目的（附属する国立大学・学部における児童、生徒、幼児の教育又は保育に関する研究に協力し、当該国立大学・学部の計画に従い、学生の教育実習の実施に当たる〔有識者会議資料より〕）、使命・役割（「実験的・先導的な学校教育」「教育実習の実施」「大学・学部における教育に関する研究への協力」）を確認。

次に、1 附属学校批判と現状 2 大分の取組等の実際 3 大分の取組等から見える附属学校園の役割の3点を柱に「地域社会における附属学校園の役割」について、「国立教員養成大学・学部、大学院における教育内容・方法等の実態等に関するアンケート調査集計結果」、大分大学教育学部附属小学校の改革に関する資料等に基づき課題の多い現状の把握と附属小学校の取組の成果を確認。

その上で、3 について ①教育実習校として、②研究開発校として、③モデル校として、④大学との連携に関しての「理論と実践の拠点」（架橋→往還→融合〔認められる授業ができて〕〔役に立つ実践研究ができて〕〔連携して人を育てることができて〕〔勤務時間内にできる幸せな先生のモデル〕）となることが求められていると結んだ。

□シンポジウム 指定討論者、パネリストの発言の概要

柳澤室長：「有識者会議報告書に基づく今後の附属学校園の在り方」

附属学校園に関わる記述を読むポイントとして、「地域と附属の連携の促進」「授業力・研修力向上の取組」「職場環境の整備」の3つを示して、具体的に解説。まとめとして「有識者会議報告書をどう読むか」として、次の3点を示した。

- 「余地」はあるが、「余裕」はない→統廃合ありきではない。動ける余地は大きい。が、時間はない。一般国民・納税者として、附属学校に期待することは何か？から逆算。要は、国民に理解されるだけの存在意義を示せるのか否か。
- これまでの延長程度では不十分、目に見える成果まで→例年の取組の延長で「やった」で自己満足せず、具体的な成果と改善を。何を目指して(Plan)、何を教育・研究し(Do)、成果が具体的に誰にどう役に立っているかを検証し(Check)、よりいい取組に改善(Action)、というサイクルを。

- まずは己の立ち位置を知る動きを→特色を出し、モデルとなるには、他校と比較した自校の把握が不可欠。全国の動きや、地域の教育課題（学力・生活指導上の問題等）も詳細に把握を！

河野小学校長：「大分大学教育学部附属小学校の改革」

附属小学校教育の重点目標「地域に役立つ附属」（・大分県長期総合計画「安心」「活力」「発展」に基づく取組、・大分県の教育課題を解決するモデル校）、重点的取組（①授業の基盤になる生活指導 あいさつ・縦割り無言清掃・履き物そろえ、②自己肯定感を育むフリートーク、③ほめ言葉のシャワー、④外国語活動、⑤総合的な学習の時間）、連携（①小学校との連携 外国語活動・総合的な学習の時間・教科の合同研修、②教育委員会・学部（教職大学院）と連携した授業づくり、③県の教育課題解決のための各種授業づくりセミナー、④教育委員会・学部と連携した教育実習（「新大分スタンダード」を意識した授業づくり）の紹介、年次制・前例踏襲の排除等、組織・業務等のスリム化・スクラップの取組と改革の検証等、附属小学校の4年間の学校改革の経緯とその成果の説明。その上で、今後の課題として、「学部・教職大学院・附属の一体改革で、さらに地域に役に立つ附属へ」（・教職生活全体を見据えた教員研修の場、・現職教員のための日常的な研修の場）を目指す方向性を示した。

川崎連携統括長：「附属四校園の一体改革について」

附属学校園の一体改革について、初めに、附属学校園の大学や県・大分市との関係・位置づけ・役割、附属学校園の運営及び教育研究に関する組織・関係会議等についての説明があり、次に、改革の背景（第3期中期目標、有識者会議等）、内容（①教育実習の改革-即戦力養成のための実習体制の整備、大学教員との協働促進、②教育研究-教育体制・研究体制の整備、③地域との連携、④環境整備-職務環境・教育環境）、方法（①改革のビフォーアフター-業務のスリム化・スクラップ&ビルド、②ガバナンス-大学・学部のガバナンス、各学校園におけるガバナンス）についての説明。続いて、取組の現状と各学校園での取組について紹介。まとめとして、次の2点の改革の成果が示された。

◎附属四校園の組織・体制

校園長の常勤化、マネジメント体制、一体的組織運営

◎附属四校園の一体改革

- 1) 教育実習の改革＝実習体制の一体的整備、大学教員との協働
- 2) 教育研究＝研究体制の一体的整備（人材バンクの活用）
- 3) 地域との連携＝モデル校としての機能充実（県の教育課題の採用・還元）
- 4) 環境の整備＝環境の整備（勤務時間の適正化、諸会議・行事等の見直し）

米持義務教育課長：「大分県教育委員会からみた附属学校の役割や意義」

初めに、大分県内の学校数、教員数、学校規模、全国学力・学習状況調査結果等学校教育の概要の説明。次に、大分県の教育施策「学校・教職員・子どもに係る7つのキーワード」の紹介。続いて、「県教育委員会として注目したい大分附属学校園の存在と取組」として4点が挙げられた。①人材育成機関の役割、②校種間連携の取組モデル、③継続的グローバル人材育成モデル、④力が付くスゴ技授業モデル。

まとめとして、今後の期待や可能性として、次の7点が示された。

<附属への期待>

- 1 四校園のグランドデザインや学校のカタチ（道徳、学活等も）の見える公開
- 2 資質・能力「3つの柱」で貫かれた教育課程モデルの提示と実践
- 3 習熟度別指導、複式指導、遠隔合同授業、部活等の好指導事例の提示
- 4 出前授業等によるスゴ技を広げる公立学校との交流

＜今後考えられること＞

- 1 人材育成システムの強化
- 2 人事交流の活性化（公立，附属，大学，教委，文科間）
- 3 カリキュラムモデル等紹介・協働作成
- 4 授業モデルの紹介・YouTubeUP

各パネリストからの発表の後，質問カードによるフロアーとの質疑応答がなされた。また，シンポジウム終了後には情報交換会がもたれ，大分大学，文部科学省，附属学校園，一般の参加者等と大学改革・附属学校園の改革等について意見交換が行われた。

（文責 堀之内睦男）

■教育実践総合センター研究紀要「教育実践学研究」第23号原稿募集（再掲）

当センターだよりの前号（8月1日発行）でアナウンスしましたが，平成29年度教育実践総合センター研究紀要「教育実践学研究」第23号の原稿を，下記要領により募集しております。多くの方々からの，教育実践学研究の推進に資する論文の投稿を，お待ちしております。なお，附属教育実践総合センター刊行内規と執筆要綱は，以下のセンターWebサイトで閲覧できますので，投稿される方はご一読ください。 <http://www.cer.yamanashi.ac.jp/centerkenkyukiyou.html>

1. 投稿申込について

(1) 申込資格：

- (a) 教育学域，教育学研究科教員，教育学部教員（附属学校園教員・非常勤講師を含む。）及び退職者（ただし，本学部等に在職時の研究に関する発表のみ可）。
- (b) 教育学域，教育学研究科・教育実践総合センター客員教授，研究員及び研究協力者。
- (c) 教育学研究科所属の大学院生（大学院生は指導教員等の承認が必要です）。
- (d) その他，センター研究紀要編集委員会が認めた者。

(2) 申込締切：平成29年9月28日（木）

(3) 申込方法：以下の項目について記したメールを jissen@ml.yamanashi.ac.jp 宛てに送ってください。

- ☆ 申込者の氏名と所属
- ☆ 共著者全員の氏名と所属
- ☆ 指導教員名（筆頭著者が大学院生の場合）
- ☆ 論文題目
- ☆ 論文の予定総ページ数

2. 原稿提出について

(1) 提出締切：平成29年10月26日（木）

(2) 提出方法：

☆ 図表・写真等を含む原稿のすべてをメールまたは CD，USB メモリー等により提出してください。

☆ 図表・写真は各々別ファイルにしてください。

☆ 論文全体のレイアウトのわかるプリントアウトを1部提出してください。

(3) 提出先：

☆ 提出メールアドレス：jissen@ml.yamanashi.ac.jp

☆ CD，USB メモリー，プリントアウトの提出：教育実践総合センター事務室（J424・内線 8325）

3. その他

- (1) 刊行内規や執筆要綱については教育実践総合センターのWebページ

「<http://www.cer.yamanashi.ac.jp/>」から、「センター出版物」－「センター研究紀要」－「投稿案内」とメニューをたどってください。

- (2) 締切を厳守してください。
- (3) 原稿の体裁，分量等について，編集委員会より修正をお願いすることがあります。
- (4) 不明な点に関しては jissen@ml.yamanashi.ac.jp に御相談ください。
- (5) 研究紀要は，pdf ファイルによるセンターWeb 公開と，掲載論文の概要等を印刷した研究紀要概要リーフレットの配布が行われますが，印刷された冊子はつくられません。
- (6) 抜刷印刷をご希望の方は，論文著者の経費で承ります。

これまでのセンターだよりの一部は， <http://www.cer.yamanashi.ac.jp/centerdayori.html> で見るすることができます。